
 新刊紹介

大橋広好訳：「国際植物命名規約 1988」

津村研究所発行 2,500円

学名に含まれる情報はたくさんあります。その種のだった歴史が凝縮されているといっても過言ではありません。一つの例として、褐藻ヘラヤハズの学名 *Dictyopteris prolifera* (Okamura in De Toni et Okamura) Okamura [Basionym: *Haliseris prolifera*] には次のような履歴が要約されています。はじめに岡村は De Toni との共著の論文の中で *Haliseris prolifera* を新種として記載しました。のちに、この属名 *Haliseris* C. Agardh 1820 が *Dictyopteris* Lamouroux 1809 の異名 (nomenclatural synonym), すなわち同じ藻類に2つ以上の名前があるときの非合法な方の名前 (illegitimate name) とわかったので、優先権 (priority) をもつ *Dictyopteris* に属を移して、新組合わせ (new combination; comb. nov.) としました。この際、最初に記載された種名が、基礎異名またはバシオニム (basionym) とよべれます。なおそれ以前にもこの属には *Neurocarpus* Weber et Mohr 1806 という属名が存在し、優先権がありました。でも *Dictyopteris* の方が一般に用いられる機会が多かったので、国際会議ではこちらが保存名 (conserved name; nom. cons.) として認められ、*Neurocarpus* は廃棄名 (rejected name; nom. rej.) として用いることはできなくなったのです。

さて、上の例で述べたような学名の書き方や変更の手続きは、学者によりまちまちでした。国際的に取り決めておかななくてはならないということで、20世紀初頭より国際的な植物学の会議があるたびに国際植物命名規約としてまとめられることになりました。1987年ベルリンの国際植物学会議で決まったベルリン規約 (1988) が最新のものです。ところで、この規約はほとんど法律文で書かれています。法律書はその内容を

覚えておくものではなく、問題に直面したときに使いこなすものです。そのためにいちいち英語で書かれた原書を参照していたのでは、訳すことに精力を使い果たしてしまい、本当に理解したい内容がわからずじまいで終わってしまいます。かつて私自身、大学院のセミナーで「シアトル規約」「シドニー規約」の日本語訳を試みました。でもただ逐語的に訳したので、本来意味するところが伝わりません。結局、微妙な問題は原書にあたって、苦勞して解決することになりました。本書はそういう状況の中で強く待ち望まれていた日本語訳といえます。しかも原書の直訳ではなくその法律文特有のニュアンスをうまく日本語でつたえています。例えば、conserved name は従来の訳語である「保留名」のかわりに「保存名」とされ、分かりやすくなっています。また diagnosis も、従来の「記相」から「判別文」となり、しっくりしました。また prologue を「初発表文」とし、synonym や homonym を単に「異名」「同名」としているのも明瞭でよいと思います。原書にはカリフォルニア大学のシルバ博士による藻類の実例がいくつも引用されており、その和訳も学名理解の手助けとなって、親近感をおぼえます。また和英ラテン語による事項索引が、新旧語訳も含めてあり、とても使いやすくなっています。本書を最初に目を通したとき、理解が十分でなかった部分があり、目から鱗が落ちるような感じました。私ども、多かれすくなかれ学名を使用したり、理解したりする必要がある者にとり本書は座右の書といえます。

ひとつ、原書の3分の2を占める保存名、廃棄名のリストが収録されていないのが残念です。世界的に見て、今後ますます保存名が追加される方向にあります。本書にこのリストが収録されることを期待いたします。

(国立科学博物館 田中次郎)

 新刊紹介

Abbott, I. A. (Ed.): *Taxonomy of Economic Seaweeds. With reference to some Pacific and Western Atlantic species. vol. III.* xiv+241 pp.

California Sea Grant College, University of California, La Jolla, California. 1992. \$10.00

本書は1989年8月にカリフォルニア大学サンディエゴ校スクリプス海洋研究所において行われた「第3回有用海藻の分類に関するワークショップ」の成果をまとめたものである。このワークショップはハワイ大学のI. A. Abbott教授を中心にCalifornia Sea Grant College Programの後援によって開催されているもので第1回目はグアム島で、第2回目は中国の青島で開催され、それぞれの成果はこのシリーズの第1巻、第2巻としてすでに刊行されている。第3回ワークショップは17名の研究者の参加によって行われ、日本からは吉田忠生氏、鎌坂哲朗氏の2名が参加している。このうち8名がホンダワラ類、5名がオゴノリ類、4名がテングサ類、1名がキリンサイ類を主な対象としている(一部メンバーの重複あり)。

本書は全体でインデックスを除くと4つの章から成り立っており、それぞれの章に編者のイントロダクションがつけられている。このうち、全体の約3/5がホンダワラ類に当てられており、このワークショップの今回の主要な課題であったことがわかる。ホンダワラ類の章のイントロダクションで編者のAbbott氏はホンダワラ類の詳細な分類の研究が以前の2回のワークショップの成果で大きく前進したもののまだ端緒にいたばかりであることを強調している。これまでに温帯と亜熱帯域のホンダワラ類についてはかなり検討がなされたが、熱帯の大部分がまだ手つかずの状態であり、温帯、亜熱帯域ですらまだ全体を網羅したとはい

えない。今回は中国のホンダワラ類のほか韓国とフィリピンの標本の分類が新たに検討されており、さらに琉球列島とカリブ海のホンダワラ類の比較研究の結果など全体で8つの論文が収められている。次のテングサ類の章には3つの論文が含まれている。編者も述べているようにこれまでのこのワークショップにおけるテングサ類の分類はどちらかというところまでの分類系を継承するものであったがこの巻においてはその分類形質を見直そうとする試みがみられ、*Gelidium* 属と *Pterocladia* 属の関係の見直しや *Gelidiella* 属の形態に関する論文が含まれている。一方、オゴノリ類の分類では過去のワークショップでも *Polycarvornosa* や *Gracilariopsis* の有効性など特に属レベルの取り扱いに関して多くの新しい提案がなされやや混乱した状況にあったが、今回のワークショップの結論としては古い属名である *Gracilaria* 属だけを用いるということになったようである。本書のオゴノリ類の章には3つの論文が含まれている。また、最後のキリンサイ類の章には吉田忠生氏のアマクサキリンサイの選定基準標本 (lectotype) の選定に関するノートが含まれている。

本ワークショップは札幌での第4回ワークショップも終了し、今後もさらに継続されることと思うが、各国の研究者の意見交換の場としてまた国際共同研究の基礎としてさらに発展することを期待する。

本書の購入をご希望の方は下記の住所に直接申し込めば入手できる。

California Sea Grant College, University of California, 9500 Gilman Drive, La Jolla, California 92093-0232, U.S.A.

(北大・理・植物 川井浩史)